

OKINAWA

も っ と 知 ろ う よ ! オ キ ナ ワ !

第17回 2018 沖縄シンポジウム

「沖縄とともに—1945年6月23日を心に刻む」

人権擁護委員会 沖縄問題対策部会 委員 寺崎 昭義 (24 期)

1 6月23日は、 沖縄県の「慰霊の日」である

約9万4000人の沖縄住民と、ほぼ同数の日本兵の犠牲者を出したといわれている第2次世界大戦末期の沖縄戦。1945（昭和20）年4月、沖縄本島に米軍が上陸し、数か月にわたって沖縄住民を巻き込んだ地上戦が続いた。6月22日、日本軍守備隊の司令官が自決し、23日に組織的な戦闘は終了したとされている。

「鉄の暴風」といわれた米軍の砲爆撃などで亡くなった民間人は6万5908人におよび、当時の県民の約2割以上に相当する。

糸満市摩文仁の平和祈念公園では、毎年この日に沖縄全戦没者追悼式が行われている。

2018（平成30）年6月23日、弁護士会館クレオにおいて、当部会が企画した標記のシンポジウムが開催された。このシンポジウムは、沖縄県の「慰霊の日」にあたって、戦争の記憶を風化させないこと、また、沖縄においては、今でも県民の反対をよそに、新たな基地が造られようとしており、沖縄では戦後は終わっていないことを知ることをテーマにしたものである。このシンポジウムでは、第1部では、日本で唯一の地上戦である沖縄戦について牛島貞満氏が、第2部では土木技術者からみた辺野古基地建設の問題点について奥間政則氏が、それぞれ講演を行った。

シンポジウムの開始前には、2004（平成16）年8月の沖縄国際大学への米軍ヘリコプター墜落のビデオの上映が行われた。

2 第1部 祖父牛島満と沖縄戦を語る ～国内最後の地上戦から何を学ぶのか～

牛島貞満さんは、日本軍沖縄守備隊（陸軍第32軍）



牛島貞満氏

司令官牛島満の孫であり、昨年3月まで、東京都公立小学校の教員であった。41歳から沖縄で祖父について調べはじめ、2002（平成14）年からは東京で、2004（平成16）年からは沖縄で、「牛島満と沖縄戦」をテーマにして沖縄戦を伝える授業を始めた。

牛島氏は、沖縄県糸満市の沖縄県平和祈念公園内の平和の礎にある2人の名前（「屋宣和子さん（当時0歳）」と「牛島満（当時57歳）沖縄守備隊第32軍司令官」と鉄の暴風についての話から講演をはじめた。「戦場ぬ童」（いくさばのわらべ）（1985年制作）を2分30秒に編集。米軍の撮影した映像で、「鉄の暴風」とは何か、「花火と砲弾とで何が違うのか」を語られた。

次に沖縄戦を体験した住民の体験談のビデオを上映し、住民から見た沖縄戦を語られた。

さらに祖父牛島満はどんな人であったかを話され、沖縄戦が「本土決戦準備の時間かせぎ」（持久戦＝皇土（本土）の防波堤）としてあったことを述べられた。

さらに会場の人々に自分だったら日本軍「沖縄守備隊（第32軍）」として、どのような作戦をとるかと質問され、答えてもらう「授業形式」で話をすすめられた。講演中には、砲弾の破片が会場内に回され、暴風の如く飛びかった砲弾の「重さ」を実感させられた。

そして、牛島司令官の「最後まで敢闘し、悠久の大義に生くべし」との命令の下、「8月15日の終戦」後の9月まで沖縄で戦闘が行われていたとの事実が語られた。



シンポジウムの様子



奥間政則氏

3 第2部 土木技術者からみた辺野古基地建設の問題点～地盤問題で窮地に追い込まれた防衛局～

奥間政則氏は、2015（平成27）年から高江の坐り込みに参加し、ずさんなヘリパッド建設工事について、土木技術者として、技術的観点から問題点を指摘してきた。そして、辺野古では、海洋土木工事の経験を活かして、ケーソン護岸の基礎構造に問題があることを指摘し、地質学者の協力を得て活断層の問題を明らかにしてきた。

奥間氏は、辺野古新基地建設には、ケーソン護岸や海底地盤など多くの問題が山積みしていることを技術的観点から指摘された。

まず、海底の水平な場所に捨石という大きな石を投入して基礎の土台としてその上にケーソン（コンクリートの構造物）を設置する防衛局の護岸工事に関して、ケーソンという護岸の基礎構造について、護岸直下の地盤は、軟弱で傾斜していることを指摘した。そして、この地盤が、専門家が「マヨネーズ並みの軟らかさの可能性」と指摘していることを述べられ、軟弱地盤とみられる大浦湾岸のケーソン式護岸は、「幅200～300メートル、延長600メートル」ほどの地盤改良をしないと安全な構造物はできないと推測されること、護岸部分だけでなく大浦湾側の広い範囲で地盤改良が必要となる可能性のあることも指摘した。

また、2017（平成29）年2月の多目的作業船POSE

イドンによるボーリング調査のデータから、地質学者が辺野古海底に活断層が存在する可能性を指摘していることを明らかにされた。

奥間氏の講演によって、辺野古基地建設にはケーソン護岸の構造に問題があり活断層の問題もあるなど、基地建設に技術的な問題のあることが明らかにされた。

奥間氏は、父親がハンセン病で隔離収容されていた事実を父親の手記で知ったことを話され、ハンセン病・原発そして辺野古基地建設に共通して正しい情報が国民に伝えられずに「国策」が押し進められることの問題について話され、今回の辺野古基地建設について、技術者の正確な情報を多くの人に提供することの重要性を述べられた。

4 写真展 米軍機の墜落

また、6月18日から23日までの1週間、2018沖縄シンポジウム同時企画写真展「米軍機の墜落」が弁護士会館1階ロビーで開催された。

写真展では沖縄タイムス社、琉球新報社の協力をえて、米軍機墜落事故の写真を中心に三十数点の写真の展示が行われた。また、写真家山城博明氏から提供いただいた辺野古基地建設や最近の米軍ヘリ不時着に関する写真十数点の展示も行われ、500名を超える来場者があった。

当部会は、昨年6月24日に、「慰霊の日」にあわせて、沖縄問題のシンポジウムと写真展を開催しており、来年以降も引き続き「沖縄とともに」をテーマに1945年6月23日を心に刻むシンポジウムと写真展を開催することを予定している。